

中華人民共和国初期における肺結核医学資料 の編纂と出版（1949–1957）

瞿 艷 丹

はじめに	217
I 中華人民共和国成立直後の時期（1949–1952）	218
II 第一次五カ年計画期（1953–1957）	235
おわりに	245

はじめに

近代以降の中国においては、肺結核は国家・民族の存亡を脅かす危険な感染症と認識され、さらには中国が「東亜病夫」になった要因だと考えられている。結核専門医、公衆衛生専門家、知識人をはじめとする各界の多くの人士が肺結核予防治療事業に熱心に取り組み、1933年上海において中国防癆協会を成立し、民衆に肺結核に関する種々の知識を宣伝し、肺結核予防治療運動（防癆運動）を発起した。それと同時に、肺結核予防治療知識に関する書籍や小冊子などの資料が大量に出版され、その中には、日本語や英語などの資料から中国語に翻訳されたものがあり、中国人医師や患者が自分の体験に基づいて綴ったものも少なくない。特效薬がまだ開発されていなかった時代に、肺結核の高い感染率と死亡率は多くの人々にかつてない恐怖を与えた。それ故に、当時の人々は肺結核に対して格別な関心を抱き、肺結核に関する資料も広く読まれていた⁽¹⁾。

日中戦争終結後、中国各界の人士は肺結核蔓延に危機感を抱き、肺結核予防治療運動を改めて発起し、ひいては1948年に中国防癆協会を再編し、肺結核の撲滅を戦後復興の重要な一環とみなした。中華人民共和国成立後、中国防癆協会はまたしても新たな課題に立ち向かった。近代中国における肺結核問題について、2013年に広東省防癆協会が出版した『新中国防癆紀実』は、次のように述べる。

新中国の成立以前、中国人民は封建主義と帝国主義の二重の抑圧のもと、経済は窮困し、医療衛生は劣悪な状況に置かれたため、結核病が国内に広く蔓延し、貧しい人々は生きてゆくことができなかつた。結核は貧困状態にあった下層社会に蔓延し、社会の栄養失調の象徴であつた。結核に罹つた多くの国民は痩せて顔色も悪く、身体虚弱な体質、まさに病夫そのものだつた。中国人が列強によって「東亜病夫」と蔑まれた要因の一つとして、肺結核が挙げられるのもそれゆえである。結核病はその国の貧困と遅れの代名詞であつた。無数の中国人の命を奪つた結核は、いわば現代のガンよりもっと恐ろしい存在だつたのである⁽²⁾。

こうした記述は現代中国の医学教科書や一般書によく見られ、通説として広く受け入れられている。封建主義と帝国主義の二重の圧迫を肺結核蔓延の要因とするなどの肺結核に関する解釈や認識がいつ形成され、また如何に人々に浸透していったのかが、本稿が関心を持つ議題である。そのほか、人民共和国成立後、民国期における肺結核に関する知識や観念が如何に引き継がれ、また如何に変貌していったのかについても明らかにしたい。

これらの問題を解明するために、本稿は中華人民共和国初期に刊行された各種肺結核に関する書籍や小冊子などの資料が果たした役割に注目したい。建国初期の歴史背景をふまえ、これらの出版物の形式や内容を詳しく分析する。こうした資料は、中華人民共和国初期に各地で数多く編纂・出版されたため、これらすべてを網羅し蒐集することは難しいが、本稿は『全国新書目』、『全国総書目』⁽³⁾、「読秀」データベース（読秀知識庫）⁽⁴⁾、中国国家デジタル図書館（中国国家数字図書館）などの書誌目録や電子書籍を利用し、1949年10月から1957年にかけて出版された結核に関する出版物の目録（表1を参照。デジタル版もしくは現物を確認できるもののみを収録）を中心に整理し⁽⁵⁾、建国直後（1949-1952）と第一次五カ年計画期（1953-1957）に分ける⁽⁶⁾。その上で、各時期の代表的な出版物を取り上げ、当時の衛生政策や出版状況などを参照し、それぞれの時代の特徴について検討する。さらに、これらの資料が如何に読まれたのか、当時の肺結核患者はどのような体験を持つのかなどにも着目する。

I 中華人民共和国成立直後の時期（1949-1952）

1 民国期の医学知識遺産の継承と変貌

中華人民共和国成立以降、新旧社会の変化に関する言論は、しばしば1949年中共政権の樹立を重要な境として展開されている。肺結核予防治療に関する議論も同じようなパター

表1 中華人民共和国建国初期の肺結核医学書・小冊子（1949-1963）

書名	出版社、出版時期	部数	編著者	訳者	備考
抗癆手冊	上海：家庭医薬社 1949.10 初版		陳炎冰		家庭医薬小叢書
結核病常識	上海：家出版社 1949.11 初版		何沢湧		1945年完稿、裘祖源 審閲、戈紹龍推薦
抗癆戦争	上海：家出版社 1949.1 初版 1950.1 再版		余正行、戈紹龍 校閲		
肺癆概論	上海：文通書局 1947.9 初版 1948 一版 1950.2 再版 1951 増訂	2,000	陳慶魁		
肺結核療養新術	上海：商務印書館 1934.10 初版 1937.3 三版 1938.3 四版 1950.2 再版	2,000	遠藤繁清	文介藩、彭農 根	学芸叢書 原著：療養新道
肺病療養指南	瀋陽：盛京施医院 肺病科 1933 初版 1948 第8版 瀋陽：東北医学図 書出版社 1950 第9版 1952.9 第10版 北京：人民衛生出 版社 1953.12 修訂初版	8,000	劉同倫		
結核病指南	北京：生活・読書・ 新知三聯書店 1950.3 初版			戈紹龍	ドイツ語から翻訳した
肺結核症再発之 予防	上海：商務印書館 1922.6 初版 1947.7 六版 1950.5 七版	7,000	Lomisch	洪式閻訳述、 顧寿白校訂	原著： <i>Prevention of Relapses of Tuberculosis</i>
卡介苗	上海：文通書局 1950.7 初版 1950.9 再版 1952年1月三版	3,000 ~6,000 ~7,000	王小石		「人民科学通俗講話」 シリーズ
肺結核治療問題	上海：時代出版社 1950.7 初版 1950.12 二刷 1951.4 三刷	2,000 3,000 3,000	В. Эйнис и др.	朱濱生	医師臨床手冊 原著： <i>вопросы терапии легочного туберкулеза, 1951</i>

表1 (続き)

書名	出版社、出版時期	部数	編著者	訳者	備考
肺結核之常識	上海：商務印書館 1950.8七版		今村荒男	張矯然	医学小叢書 1935年11月初版
肺病療養談	上海：中華書局 1932.7初版 1947.10五版 1950.8月六版		龍毓瑩		
上海結核病防治 工作特輯	1950.8		上海防癆協會		非売品
怎樣同肺病闘争	上海：北新書局 1935.4初版 1950.9再版 1951.5三版		小酒井不木	任一碧	原著：闘病術
卡介苗	上海：商務印書館 1950.12初版		仲銘		大衆新読物
防癆武器—卡介 苗	重慶：西南衛生書 報出版社 1951.1初版	15,000	西南卡介苗製造 研究所		想定した読者層：医師・ 助産師・看護師・医療 関係者・教育従事者・ 行政部門従事者・主婦
卡介苗問答	杭州：新医書局 1951.1初版		姚乃舜		人民衛生叢書
肺癆病自己療養 法	杭州：新医書局 1932初版 1948.12再版 1951.2三版		劉榮敬		
肺結核	上海：文通書局 1951.3初版		徐昌慶		保健文庫、葉雄法主編
防癆的武器卡介 苗	大連：旅大人民出 版社 1951.4初版	5,000	鄭宝雲		
害人的癆病	無錫：蘇南人民出 版社 1951.4初版	5,000	唐明晴		大衆衛生常識之二 蘇南軍区衛生部の指示
肺結核應該怎樣 療養	上海：中華書局 1951.5初版	1,0000	G. S. Erwin	葉群	大衆医学叢書 原作：A Guide for the Tuberculous Patient, 1946
結核病細菌学診 断法	北京：北京書店 1951.6初版	3,000	孟昭赫、郭鈞		
肺結核新談	上海：新中国聯合 出版社 1951.6初版 1952.9再版	2,000 4,000	顧順宝		

表1（続き）

書名	出版社、出版時期	部数	編著者	訳者	備考
肺結核之予防・診断・治療	杭州：新医書局 1951.10 初版		北本治	朱桓	原著：『肺結核の豫防・診断・治療』診断と治療社、1947
卡介菌苗接種之理論と応用	重慶：西南衛生書報出版社 1951.10 初版	3,000	K. Neville Irvine	李宋	原著：B. C. G. <i>Vaccination in theory and practice</i>
結核病護士工作指南	上海：中華書局 1951.11	5,000	М. А. Клебанова, С. В. Массино, С. Е. Незлин	鄭宗玄 (趙師震校訂)	蘇聯医学叢刊 原著：Туберкулёз (Руководство для патронажных сестёр туберкулёзных диспансеров), 1950
結核病与心理	上海：中華書局 1951.11 初版	6,000	Берлин-Чергов С. В	方敏德 (朱濱生校訂)	蘇聯医学叢刊 原著：Туберкулёз и психика, 1948
卡介苗与防癆	上海：新亞書店 1951.11	3,200	諸忍		第一回全国衛生會議に置いて掲げられた「三大原則」（面向工農兵、予防為主、団結中西医）に呼応するために出版した一般向けの医薬衛生書（予想した読者：工農大衆・革命戦士・学生・職員・家庭婦女・軍隊衛生関係者）
肺結核病学	上海：新群出版社 1951.12	2,000	王克錦		大衆知識叢書
結核及其防治	北京：健康書店 1951.12 1953.2	2,000 ~4,000	隈部英雄	孫蓮白	防疫手冊第三輯
肺病療養指導	上海：広協書局 1951 初版 1952 増訂改編		孫方成		
結核菌素与卡介苗	瀋陽：東北人民政府衛生部 1951		東北人民政府衛生部		1950年全国BCGワクチン接種の呼びかけに応じるため、東北23箇所の都市でBCGワクチンを接種する際に使われた参考書・教材
肺結核和白果	上海：広益書局 1952.1 初版		朱中徳		科学本草叢書
肺結核防治法	上海：康健書局 1952.1 初版		俞彦慈		

表1 (続き)

書名	出版社、出版時期	部数	編著者	訳者	備考
結核病：結核病 防治所巡回護診 護士教程	北京：興華書店 1952.2初版	2,000	М. А. Клебанов 等	潘崇熙	蘇聯中級医务人員叢書 之一
結核病人療養法	瀋陽：東北医学図 書出版社 1952.2初版 1952.5再版	3,000 ~5,000	Л. М. Яновская (訳名：雅諾夫 斯卡婭)	胡尚一	抗美援朝医学小叢書 原著：Поведене и лечение туберкулёзного больного, 1951
結核病人的生活 和治療	上海：文通書局 1952.3初版 1953.4三刷	~6,000	Л. М. Яновская (訳名：揚諾夫 斯卡耶)	戈紹龍	Поведене и лечение туберкулёзного больного, 1951
肺結核病	上海：文通書局 1952.7初版	1,000	華東・上海人民 廣播電台 上海市科学技術 普及協會		
卡介菌苗在防癆 戰線上的应用	瀋陽：東北医学図 書出版社 1952.10初版	3,000	K. Neville Irvine	鄭宝雲・魏文 彬	原著：B. C. G. Vaccination in theory and practice
肺結核的豫後	上海：北新書局 1952.12初版	2,000	有馬英二	趙力之	原著：『肺結核の予後』 日本医書出版、1947
肺結核早期診断	北京：健康書店 1952初版 1953.2再版	2,000 ~5,000		潘崇熙	蘇聯介紹医学叢書之二 原版：蘇聯国立医書出 版局、1951
結核病的化学治 療	上海：文通書局 1953.3初版	2,000	薛漢麟		
結核病防治法	瀋陽：東北医学図 書出版社 1953.4		蘇家屯結核防治 院予防科編著 劉同倫、范左光 校編		BCG ワクチン訓練班 の教材から編纂したも の
肺病療養手冊	杭州：新医書局 1953.8初版	2,000	楊郁生編		
实用肺結核病治 療学	上海：広協書局 1953.11初版 1954.5増修版 上海：上海衛生出 版社 1957.4増修版初版 1958.9二刷 1962.2新第一版初 印 1966.8新第二版初 印	8,000 5,000 ~7,700 5,000 5,000	吳紹青主編、顧 愷時・徐昌文・ 孫忠亮編		

表1（続き）

書名	出版社、出版時期	部数	編著者	訳者	備考
結核病	北京：中国防痨会 総会 1953.11		Михайлов	李榮錦	初級医療従業者と結核 予防治療関係者向け
結核病防治工作 参考資料	北京：中国防痨協 会総会 1953.11 初版 1954.6再版		中国防痨協会総 会		
結核病的療養	北京：中国防痨協 会総会 1953.12 初版 1954.5 再版 1955.12 三版 1958.12 四版	100,000 150,000 220,000 320,000	傅連璋		病人用防痨宣教品之一
防痨常識問答	北京：中国防痨協 会総会 1953.1 初版 1954.6再版	10,000 30,000			一般用防痨宣伝品之一 挿絵あり
防痨常識問答	北京：中国防痨協 会総会 1953.12 初版	40,000			上海防痨協会印 挿絵なし
肺結核病臨床類 型 蘇聯分類法	北京：中国防痨協 会総会 1954				
結核病答問	北京：人民衛生出 版社 1954.5 初版	17,000	劉南山		
防痨	北京：人民衛生出 版社 1954.5 初版 1954.9 二刷	8,000 ~11,000	李宋		愛国衛生叢書
肺結核手術療法	上海：上海医学出 版社 1954.6	2,000	朱燁		
肺結核の予防和 療養	北京：人民衛生出 版社 1954.6 初版 1955.2 第一版第三 次印刷	16,000 ~24,000	楊維興		
肺結核病是能治 愈的	北京：中国防痨協 会総会 1954.6 初版 1955.12 再版	20,000 ~90,000	中国防痨協会総 会		病人用防痨宣伝品之三 挿絵と見出し文で表現 する絵本

表1 (続き)

書名	出版社、出版時期	部数	編著者	訳者	備考
抗癆選集	北京：人民衛生出版社 1954.11 初版	5,500	北京市防癆委員會抗癆社編		
肺結核病治療指征	北京：中国防癆協會總會 1955.7		中国防癆協會總會		
肺結核病	福州：福建人民出版社 1955.9 初版		林守詮		衛生常識小叢書
結核病的發病機制和治療問題	北京：人民衛生出版社 1955.10 初版	4,500	蘇聯医学科学院結核病研究所所長 З.А. Лебедева	中国防癆協會總會主訳（馮秀珍等） 何宗禹、潘崇熙、徐夜校	
結核病概要	北京：中国医科大学 1955.10				
結核病醫師手冊	北京：人民衛生出版社 1955.11 初版	10,000	Ф. И. Левитин 等主編	中国防癆協會總會主訳（何長清、單長生等）、賈同彪校訂	
結核病及護理	北京：人民衛生出版社 1955.12	10,000	中華護士学会總會		北京市衛生部門學習會護理組の講義から編纂したもの、蔡如升序
学校中結核病的予防	北京：人民衛生出版社 1955. 12	4,500	проф М. И. Ойфебах	梁子鈞	原著：Предупреждение Туберкулез в школе, 1950
防癆病	北京：通俗讀物出版社 1956.3 初版	25,000	鄧宗禹		
肺結核病的治療和予防	長沙：湖南人民出版社 1956.11 初版	7,200	張為政		
肺結核病	北京：人民衛生出版社 1957.6 初版	10,000	中華医学会總會		1954年4月から1955年1月にかけて「肺結核病」をテーマとした医学学術座談会で医学専門家が発表した原稿から編纂したもの。肺結核臨床医師・医学院の教師と学生向け

表1（続き）

書名	出版社、出版時期	部数	編著者	訳者	備考
結核病人的治療	北京：人民衛生出版社 1957.6 初版	9,100	A. E. Рабухин	沈徳訳、呉執中・嚴良瑜校	原著：Лечение туберкулезного больного, 1953
肺結核病的予防和療養	上海：上海衛生出版社 1957.7	18,000	楊維興		
肺結核実験新療法	広州：広東人民出版社 1957.9 第二版	4,120	黄省三		1952年12月に香港で初版を発行。第二版は「広東中医薬研究叢書」に収録された。
我怎樣向結核病作闘争	北京：北京出版社 1957.11 初版	6,000	北京市結核病防治所『抗癆』編集室編		11 篇
断層撮影読片法	北京：中国防癆協会総会 1958.1 初版	3,750	田坂皓	中国防癆協会総会主訳、李鍾瑛校、劉慶年審校	原著：『断層撮影像の読み方：肺結核症特に空洞を中心として』医学書院、1953年
肺結核病人生活方式和治療	上海：上海衛生出版社 1958.2	14,000	C. E. Незлин	中国防癆協会訳	
羅馬尼亞医学科学院院士那斯達教授在華講演結核病問題彙集	北京：中国防癆協会 1958.5 初版	4,000	中国防癆協会・中華医学会結核病科学会合編		1957年9月13日から11月14日にかけて中国に滞在した Marius Nasta 氏の講演集
結核病的診断与実験方法	上海：上海衛生出版社 1958.6 初版	5,500	Henry Stuart Willis & Martin Marc Cummings	陳広田・錢元福・陳瑞銓訳	<i>Diagnostic and Experimental Methods in Tuberculosis</i> , Charles C. Thomas, Publisher Springfield, U. S. A., Second Ed. 1952
兒童及青年結核病学	上海：上海科学技术出版社 1958.6 初版	4,000	Werner Catel (ドイツ人)	黄中訳、朱爾梅校	原著：Lehrbuch der Tuberkulose des Kindes und des Jugendlichen, Georg Thieme Verlag-Stuttgart, 1954
婦産科結核病	上海：上海衛生出版社 1958.9 初版	7,000	George Schaefer (アメリカ人)	賈書蘭・廖賢贛・李慰璣合訳	原著：Tuberculosis in Obstetrics and Gynecology, Little, Brown and Company (Canada), First Edition, 1956

表1 (続き)

書名	出版社、出版時期	部数	編著者	訳者	備考
肺結核病大蒜療法	上海：上海科学技術出版社 1959.5 初版	20,000	浙江臨安県人民 医院、浙江嘉興 結核病防治所編 著		医学衛生躍進叢書
肺結核病羊胆療法	上海：上海科学技術出版社 1959.5 初版	22,000	馮玉龍		医学衛生躍進叢書
鍼灸治療肺結核 臨床初歩観察	上海：上海中医学 院附属第五門診部 上海市鍼灸研究所 1959.9				本書は59篇の論文を 収録する。
広東省治療肺結 核経験選集	広東省中医研究庁 1960		広東省中医研究 庁編		
怎樣在家裏護理 肺結核病人	上海：上海科学技術出版社 1960.4 初版	16,000	劉学坡		
肺結核病防治的 新階段	合肥：安徽人民出 版社 1961		許学受		
錦方選集第1冊 内科（咳嗽・哮喘・ 肺癆・血症）	重慶：重慶市衛生 局 1961.2				本書は中医学の薬方を 多く収録する。
肺結核	長沙：湖南科学技術出版社 1962.7 初版	2,100	湖南中医薬研究 所		中医臨症参考小叢書
結核病的化学与 化学療法	上海：上海科学技術出版社 1962.12 初版	4,500	Esmond R. Long (アメリカ人)	黄紹彪訳	原著：The <i>Chemistry and Chemotherapy of Tuberculosis</i> , The Williams & Wilkins Company 3 rd Ed, 1958
人体肺部病灶内 的結核桿菌	上海：上海科学技術出版社 1963.4 初版	5,500	Georges Canetti (フランス人)	陳広田・曾紀 霖訳、章谷生 校	原著：The <i>Tubercle Bacillus in the Pulmonary Lesion of Man</i> , Springer Publishing Co. Inc, 1955

出典：中央人民政府出版総署図書館編『1953年全国新書目』「医学・衛生」（1954）、新華書店総店編集・出版『全国総書目』（1955・1957年、内部発行）、読秀学術データベース（読秀知識庫）、中国国家デジタル図書館（中国国家数字図書館）の電子書籍などを参考に作成。

ンをとった。1953年、上海で有名であった肺結核専門家の呉紹青が民国期の肺結核予防治療事業について報告をした際、「資本主義国家の防癆方法をそのまま中国へ移し、全てのやり方は現実から外れていた」と反省した⁽⁷⁾。しかし、建国直後、民国期における肺結核予防治療に関する知識や対策が完全に捨てられたわけではなかった。それは事実上不可能である。例えば、1938年に発行を開始した防癆シール（Anti-Tuberculosis Christmas Seals、防癆章）は、1949年以降にも存続し、1953年まで発行されていた⁽⁸⁾。また、民国期に上海防癆協会や中国防癆協会が作成した宣伝ポスターの何種類かが、少なくとも1951年末まで引き続き発行されていた（表2を参照、太字で表記されているものは1951年末まで発行）。もちろん、民国期の宣伝ポスターに描かれた人物は、ほとんどチャイナドレスや長衫、もしくは洋服などのような「封建主義」や「資本主義」的な服装を身に纏い、明らかに新しい時代に相応しくなかったと言える。これによって、1953年から、中国防癆協会総会、上海防癆協会をはじめとする各地方支会はスタイルを一新した宣伝ポスターを大量に発行した。これらの新たな宣伝ポスターは色合いが鮮明で、スローガンも目立ち、人民服を着る労働者や素朴な衣装を着る農民の姿を表現するが多い⁽⁹⁾。

こうした「過渡期」において、私営出版社の再編はまだ完成しておらず、上海をはじめとする全国各地の私営出版社は民国期の医学書を再版したり、また民国期に発表した医学論文を整理して出版したりすることが多かった。言うまでもなく、新時代に向けて積極的な姿勢を示すため、一字一句変えずに再版したわけではなく、まえがきに新政権を擁護する内容を加筆したり、結核蔓延の要因についてソ連の解釈を踏襲したりと、様々な工夫を凝らした。以下、二つの例を上げておきたい。

(A) 陳炎冰編著『抗癆手冊』上海：家庭医薬社、1949年10月出版

序文を除き、正文の内容の8割は全て1947年から48年にかけて『家庭医薬』（1946年に上海で創刊された医学雑誌）に連載されたものである（表3を参照）。時代の特徴をよく反映していたのは、まえがき中の、ソ連の社会主義制度を称揚し、結核の蔓延を帝国主義や国民政府の腐敗と結びつける叙述である。また、全世界で共産主義が実現する時は、すなわち結核が消滅する時だと述べている。

(B) 余正行編著・戈紹龍校閲『抗癆戦争』上海：家出版社、1949年1月初版、1950年1月再版

本書はアメリカで出版した結核知識パンフレットや通俗書を多く参考した⁽¹⁰⁾。1950年再版本の本文内容はもちろん、表紙や目次から版式までも初版本と完全に一致している。ただし、再版本は初版本の「前言」と序文を削除し⁽¹¹⁾、出版社の声明「給您一封信」を掲載した（表4を参照）。この声明は建国直後に臨時憲法の役割を果たした「中国人民政治協商

表2 1950年8月にかけて上海防癆協会・中国防癆協会に出版された結核宣伝資料

宣伝資料名	発行部数	発行部門
防癆須知	100,000	上海防癆協会
肺癆の起因	100,000	上海防癆協会
肺癆与結婚	100,000	上海防癆協会
人類最大の仇敵—癆菌	100,000	上海防癆協会
癆病之四個初期与普遍症状	100,000	上海防癆協会
肺癆画冊	10,000	中国防癆協会
肺病家庭療養法	10,000	中国防癆協会
危機潜伏閣下知道嗎？	30,000	中国防癆協会
為什麼要照X光？	30,000	中国防癆協会
人工气胸	30,000	中国防癆協会
怎樣予防肺病蔓延	10,000	中国防癆協会
探病必読	10,000	中国防癆協会
知識測驗	10,000	中国防癆協会
若要肺病好不要忘了休息、營養、新鮮空气	30,000	中国防癆協会
新年防癆章手冊	2,000	中国防癆協会
愛子不要害子	100,000	中国防癆協会
知人知面不知肺	100,000	中国防癆協会
未雨綢繆	100,000	中国防癆協会
不可饒恕的錯誤	100,000	中国防癆協会
隱禍	100,000	中国防癆協会
打破諱疾忌医的心理	100,000	中国防癆協会
休息、栄養、和新鮮空气	100,000	中国防癆協会
仙丹、祕方不能治癆病	100,000	中国防癆協会

出典：上海防癆協会編『上海結核病防治工作特輯』1950年8月。

会議共同綱領」の条文を多く引用し、「新民主主義的文化教育發揚光大」というスローガンを掲げたうえで、次のように述べる。

近年、弊社は女性と幼児の衛生、児童福祉、家庭教育、性教育、医学栄養などの叢書三十余种を出版し、各地の児童福祉従事者や保育従事者から高評価を得ている。(中略) 新中国誕生というこのめでたい日に、我々は「中国人民政治協商会議共同綱領」の第41条「新民主主義的、すなわち民族的、科学的、大衆的の文化教育」を發揚する

表3 『家庭医薬』連載目次と『抗癆手冊』目次

『家庭医薬』連載目次		『抗癆手冊』目次
『家庭医薬』復刊第5期、1947年1月	要認識結核菌の真面目（陳炎冰）	一、要認識結核菌の真面目
第6期、1947年2月	結核菌の進攻路線（陳炎冰）	二、結核菌の進攻路線
第7、8期、1947年4月	結核菌と人体の攻防戦（陳炎冰）	三、結核菌と人体の攻防戦
第9期、1947年6月	結核菌の重要佔領地—肺結核病（陳炎冰）	四、結核菌の重要佔領地—肺結核病
第10期、1947年7月	結核菌佔領地の拡張（陳炎冰）	五、結核菌佔領地の拡張
第12期、1947年9月	怎樣建立防癆的陣線（陳炎冰）	六、怎樣建立防癆的陣線
第13期、1947年10月	怎樣堅守防癆的第二陣線（陳炎冰）	七、怎樣堅守防癆的第二陣線
第15期、1948年1月	怎樣偵察結核菌的情況（陳炎冰）	八、怎樣偵察結核菌佔領地的情況
		九、速戰速決殲滅結核菌
		十、長期抵抗消除結核病

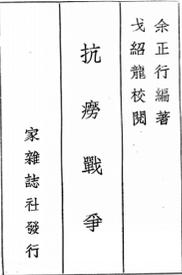
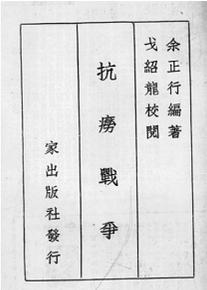
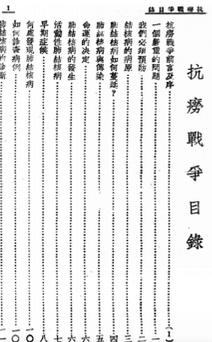
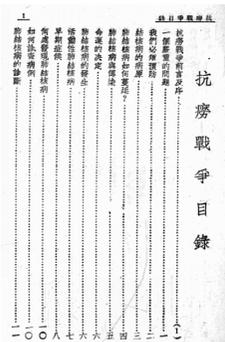
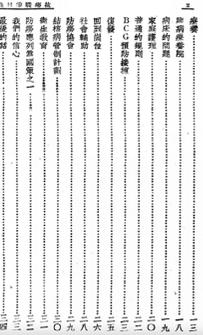
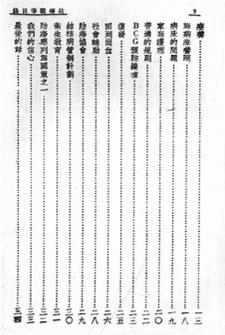
こと、第48条「医薬事業を拡張し、且つ母親、嬰兒および児童の健康を保護すること」、第49条「人民の出版事業を發展させ、且つ人民に有益なる通俗的な書物雑誌の出版を重視すること」の呼びかけを呼応するために、3年以上前に創刊された『家雑誌』の発行を続けるほか、女性と幼児の衛生および児童福祉に関する叢書を引き続き出版することを決めた⁽¹²⁾。

つまり、出版社は本来の出版事業を続けようとしたため、新政権の方針を積極的に支持する姿勢を示した。「共同綱領」をどれほど理解していたかは別として、「共同綱領」の内容や新政権への支持的な言葉を巻頭に飾っている工夫は、変動の激しい時代を乗り越えようとした出版関係者の一種の知恵とも言えよう。

2 この時期の肺結核知識に関する出版物の特徴

前述のように、この時期において全国の出版社に対する再編はまだ完成していなかったため、各地の出版物はそれぞれの特徴を呈した。清末から民国期にかけて出版業が最も盛んであった上海において、商務印書館・中華書局・広協書局・文通書局などの私営出版社は、ソ連の医学書の翻訳出版を始めた。その一方で、日本の結核通俗書の翻訳などを代表とする民国期の出版物も多く再版し、その種類や部数は依然として中国のほかの地域と比べて圧倒的に多かった。新しい時代に向けて、再版の書籍は細かな修正を行う場合、奥付の情報だけを修正したが、目次や本文を一切変えない場合も少なくなかった。

表4 『抗癆戦争』の初版と再版

位置	1949年1月初版（中国国家デジタル図書館民国文献蔵遼寧省図書館本）	1950年1月再版（読秀データベース蔵本）
封面		
奥付		
目次		
		

一方、中共が比較的早く政権基盤を構築した中国東北地域において、肺結核知識の出版物は独特な風格を備えた。まずその背景として、国共内戦期から、共産党は東北地域において衛生防疫及び出版宣伝に力を入れたことが挙げられる。これに先立ち、1945年10月、延安・山西・綏遠などの共産党根拠地から来た衛生幹部達は瀋陽に東北人民自治軍衛生部を設立する計画を立て、後ほど北満・西満・東満という三路に分け、各軍区に衛生部を置いた。翌年6月、東北民主連軍総衛生部が成立し、1948年1月に東北軍区衛生部に改名された。当時、東北地区の衛生機構は軍区と地方という二つのメカニズムが併存しており、それぞれ東北行政委員会衛生部と東北軍区衛生部に管轄された。同年11月、共産党軍は東北全境において最終的な勝利を収めたのち、東北地区に併存した軍区・地方といった二系統の行政機構は相次いで合併された。1949年4月、東北行政委員会と軍区に設置した二つの衛生部は統一された⁽¹³⁾。

1950年1月6日、東北人民政府衛生部は「予防為主、医療為輔」といった全国の衛生総方針に応じて、「人々にほとんど注意が払われず、国家を最も大きな危険にさらし、最も多くの人民の命と財産を失わせた肺結核と戦うこと」を決定し、資金を出して瀋陽市郊外の蘇家屯に東北結核症防治院を設立した。防治院は第二陸軍後方の病院から再編され、盛京施医院出身の肺結核専門家である劉同倫を院長として任命した⁽¹⁴⁾。同年初、東北医学図書出版社が瀋陽に設立され、中華人民共和国初期における全国初の医学図書専門出版社として、東北人民政府衛生部の管轄下に置かれた⁽¹⁵⁾。

この時期、東北地区に肺結核知識の出版物が多く刊行され、その中で特に重点を置かれたのは、BCG ワクチン接種に関する宣伝である。なぜなら、第二次世界大戦後、全世界的にBCG接種は肺結核蔓延を抑制する重要な手段として広く認識されていたからである。戦後、中国の衛生専門家や結核研究者は世界保健機関（WHO）のBCG ワクチン接種運動に積極的に参加し、「国際防癆運動」（United Nations International Tuberculosis Campaign）に呼応し⁽¹⁶⁾、中国において大規模なBCG接種を実施しようと計画したが、内戦の勃発や経済困難などの理由で、中華人民共和国成立に至るまで大規模なBCG接種は実現できなかった⁽¹⁷⁾。

1949年末、中央人民政府衛生部（1949年11月に成立）は北京・天津の各衛生機関の関係者と結核専門家などを招き、BCG ワクチン接種普及のための専門家会議を開き、1950年以降、全国各都市において、新生児・5歳以下の児童・青年労働者・学生・兵士に対してBCG ワクチン接種の普及に努めることにした⁽¹⁸⁾。1950年、東北結核症防治院が東北地区に実施したBCG接種者数は43,717人となり、その接種率を上げるため、当時の専門家は宣伝にもっと力を入れるべきだと考えた⁽¹⁹⁾。以下、BCG接種の宣伝書物の一例を挙げて見よう。

表5 *B. C. G. Vaccination in theory and practice* と二つの中国語訳本の構成比較

版本	<i>B. C. G. Vaccination in theory and practice</i>	卡介菌苗接種之理論与応用	卡介菌苗在防癆戦線上的応用
構成	Preface Foreword 1. History 2. The theory of vaccination 3. The production of the vaccine 4. Variation in the virulence of B. C. G. 5. Virulence experiments in animals 6. The safety of B. C. G. vaccination for man 7. The resistance produced in animals 8. The resistance produced in man 9. The technique of vaccination 10. A world survey of B. C. G. vaccination 11. Discussion Index of authors Subject index	訳序 1. 卡介菌苗之歴史 2. 卡介菌苗接種之理論 3. 卡介菌苗之製備 4. 卡介菌苗毒性之変易 5. 用動物所作之毒性試験 6. 卡介菌苗对人类之安全性 7. 卡介菌苗在動物發生之抵抗力 8. 卡介菌苗在人類發生之抵抗力 9. 卡介菌苗接種之技術 10. 世界各国卡介菌苗接種概況 11. 討論	編訳者の話 1. 歴史 2. 接種の理論 3. 菌苗の製造 4. 卡介菌苗毒力の変異 5. 動物中の毒力試験 6. 卡介菌苗接種对人类的安全性 7. 对動物内産生の抵抗力 8. 对人体内産生の抵抗力 9. 冷凍乾燥卡介菌苗与防癆接種 10. 接種技術 11. 卡介菌苗皮上試験の研究 12. 卡介菌苗對於進行性肺結核之治療 13. 各国使用卡介菌苗預防家畜結核病的概況 14. 活髓鼠抗酸性桿菌（代替卡介苗）接種牛体对抵抗結核病傳染的研究 15. 卡介菌苗接種世界觀 16. 討論

1952年10月、鄭宝雲・魏文斌は結核専門家のアーバイン（K. Neville Irvine）の *BCG Vaccination in Theory and Practice*（1949年、総130頁）に基づき、『卡介菌苗在防癆戦線上的応用』（東北医学図書出版社、初版3000部。以下、C書と略称）を翻訳出版した。本書はもう一種の中国語訳本があり、それは1951年に西南衛生書報社が出版した李宋訳『卡介菌苗接種之理論与応用』（初版3000部。以下、D書と略称）である⁽²⁰⁾。しかし、C、D両書は構成や内容に大きな差異が見られる（表5を参照）。D書は原作に沿って翻訳され、合わせて11章ある。紙幅節約のため、原作の章ごとに付した参考文献と短序・前書きを省略した。C書は16章あり、その中で第9章、第11から15章にかけての内容は訳者が増補改訂したものである。全体から言うと、至るところに大幅な加筆・削除・修正が施された。このような恣意的な翻訳を行う理由を訳者鄭宝雲は次のように説明する。

本書大部分の資料はK. Neville Irvineが著した *BCG Vaccination in Theory and Practice* によって翻訳されたが、私が自らの批判的な態度に則って削除した内容も少なくない。

例えば、資本主義国家において資産階級に奉仕する一部のいわゆる「科学者」は、しばしば種族優劣といった反動的なことを用いることで、自身の実験科学医学の論証を解釈する。原書の編者がいかに客観的に叙述しても、こうしたところに（種族優劣を）そのまま描写している。故に、原書には資本主義国家が往々にしてBCG接種事業に対して示した冷淡な態度が露骨に現れている。とりわけ世界に覇を唱えようと企む貪欲な狼—アメリカの帝国主義者は、いわゆる「世界衛生組織」〔WHO—引用者注〕や「国際救済基金」〔連合国救済復興機関の特別基金、UNRRA special fund—引用者注〕を通して人を騙そうとしている。科学者を多く雇用し、善行や施しを企図する。原書におけるこのような内容は全て私が削除した。

最も主要なのは、我が国のBCG接種に関する資料や成績を本書に編入したことである。そのほか、偉大なる社会主義国家—ソ連の科学者が創出した乾燥BCGワクチンの製造・応用方法に関する文献をいくつか編入し、また手元にある資料を参考にし、ソ連国内のBCGワクチンに関する成績を多少紹介した。ソ連の科学者は労働者や無産階級出身で、先進的な経験を無限に持っている。我々はいつも彼らから学ぶに値する。なぜならソ連の科学は多くの労働人民のために奉仕しているからだ。

編者がBCG防癆実践の中から得た些少な知識についても、この本に織り込んだ⁽²¹⁾。

前述の通り、C書の本文にはソ連の肺結核予防治療知識や社会主義制度に対する賛美が随所に見られる。例えば、C書の第1章末に「1949年、中国人民革命が勝利を収め、中央人民政府が北京に成立した後こそ、中国の防癆事業は進歩の今日と将来を有する」（5頁）と述べており、また第16章の冒頭で、先進的な社会主義国家のソ連においてはBCGワクチン接種推進の成績が卓越しており、「人民自分が政権を握ってこそ、まともな人民保険事業の誕生が可能となる。我が中国は共産党と毛沢東の指導のもとで、人民の保健事業について社会主義の方向を目指して進めていく」（172頁）と強く賛美する。しかしながら、1955年に、C書は理論を歪曲して資料が散漫でまとまりがなく、医学専門用語を統一せず、またソ連の先進的な学説の紹介が非常に不足しているなどと、医学界で厳しく批判された⁽²²⁾。

ほかの地域と比べて早い段階から共産党の衛生出版事業が行われた東北地区において、前述のような政治的色彩の強いもの以外に、満州国時代に出版された書籍を再版したものもある。劉同倫著『肺病療養指南』がその一例として挙げられる。本書の初版は1933年に瀋陽小河沿盛京施医院肺病科から刊行され、その後度々重版を経て、1952年に東北医学図書出版社から第十版が刊行され、発行部数は8000部であった。翌年北京の人民衛生出版社により修訂第一版が刊行され、発行部数は10000部に達した。

以上のように、この時期の出版物には、近代中国における肺結核の蔓延を封建主義・帝国主義の二重の圧迫と結びつけ、アメリカを筆頭とする資本主義国家を批判し、共産党および社会主義制度の優位性を強調する言論が、すでに現れていた。ただし、全体からみると、政治的な色彩が出版物の隅々まで浸透したとは言えない。建国初期に肺結核知識の資料が依然として必要とされたため、民国期の出版物が再版されることも少なくなかった。

3 思想改造に対する肺結核専門家の反応

1951年秋から、中央人民政府は全国の知識人に対して思想改造運動を行なった。とりわけ1952年6月18日、『人民日報』に「一切医薬衛生工作者都要進行思想改造」という社説が掲載された後⁽²³⁾、医療関係者も思想改造の嵐に巻き込まれた。同年9月、華東医務生活社出版社が『医務工作者必須進行思想改造』を出版し、アメリカ帝国主義を崇拜する思想を徹底的に取り除き、北京協和医学院の過去を徹底的に批判するなど重点をおいて議論した。本書は初版では22000部が発行され、1952年11月に二刷の10000部、53年5月に三刷の10000部を増刷した⁽²⁴⁾。肺結核予防治療専門家には協和医学院出身者やアメリカに留学した経験を持つものが多いため、こうした思想改造に対して態度を明らかにしなければならない。例えば、天津第一結核病防治院長の朱宗堯は人民の健康を保障し、祖国の工業化を実行するために有利な条件を創出するため、防痨従事者が徹底的に思想改造を行うべきだと指摘したうえで、次のように述べる。

我々は（党中央の）文書をよく学び、その真の意味を理解すべきだ。さらに自分自身と現状を結びつけ、自らの思想を確認・分析し、欠けている点を大胆に晒さなければならない。真理を追求し、それを守り続け、誤りを修正する実直な姿勢を保つことで、正しい立場に立ち、批判と自己批判という武器を得ることができる⁽²⁵⁾。

一見すると抜かりない議論であるが、しかし当時の医療関係者はみなこのような注意深い態度を示したわけではない。思想改造の風潮を医師たちはどこまで認めたのかについては少し疑問が残る。朱宗堯の指導教員、協和医学院出身の肺結核専門家である裘祖源は「結核病知識的発展」を発表し、中米両国の肺結核問題について次のように述べる。

10年前、私はアメリカ第二の都市シカゴに行ったとき、数多くの高層建築を見たが、多くの貧者が陰湿な地下室に住み、多数の人、さらには三組の集団が同居していた。生産が発達したアメリカではありえない現象であるが、機械化すればするほど、必要

な労働者数が少なくなり、失業者が多くなり、労働者の生活条件が日増しに悪くなり、住居環境が悪化し狭くなることで、肺結核も蔓延しやすくなる。（中略）現在、我が国では人口の約7割が農村に住んでおり、今後我が国が工業化を進めていくことで、いきおい大量の農民が都市部や工業区に出稼ぎに行くことになるため、肺結核の問題も生じるかもしれない。私はこのことを特に強調し、警鐘を鳴らしたい。我々は歴史的教訓から学ぶべきであり、防痲事業の展開に真摯に取り組み、工業化の進展にともなう結核病の威猛を許してはならない。まして我が国は今強力な労働保険制度と国家工作人員の公費医療予防制度を整えて、防痲に有利となる基盤を建設中である。我々防痲従事者は誠心誠意努力し、群衆を啓発することで、工業化発展に伴う中国の肺結核問題の深刻化を避けられると信じている⁽²⁶⁾。

以上のように、裘祖源は当時さかんに宣伝された反帝国主義や反資本主義的な表現と異なる、比較的冷静な態度を示した。裘はアメリカの資本主義や帝国主義を批判したが、肺結核蔓延の理由について、帝国主義の圧迫より、むしろ工業化の発展と結びつけた。これは19世紀後半以降、欧米や日本などの国によく見られた見解である⁽²⁷⁾。しかし、このような認識は共産党幹部の不興を招き、1957年に反右派闘争の中で、裘祖源は崔毅忱・劉南山などのアメリカ留学経験を持つ肺結核専門家たちとともに、「ソ連を反対しアメリカを崇拝した」「反党・反社会主義の立場に立った」など、猛烈な批判を受けて、「防痲界の右派分子」として打倒された⁽²⁸⁾。

II 第一次五カ年計画期（1953-1957）

1 中国防痲協会の再編

建国直後から数年間の過渡期を経て、中国における肺結核予防治療事業は一定の成果を収め、その中で、大都市や地方工業都市を中心とする人材育成の面においても、同様に一定の成績をあげた。例えば、1952年9月から翌年4月9日にかけて、北京市防痲技術員訓練班の第一期は研修を終えた⁽²⁹⁾。同年4月25日、ソ連専門家と中国結核専門家の指導により、四ヶ月にわたる中央衛生部工鉞防痲訓練班の第一期は訓練を完了した⁽³⁰⁾。同年8月末頃、中国防痲協会の再編が完成した。これによって、1953年から、中国における肺結核予防治療事業は、中央集権的な新階段に入った。以下、中国防痲協会再編前後の変化をみてみたい。

1933年10月21日、中国防痲協会が上海で設立され、「防痲救国」というスローガンが掲

表6 1948年中国防癆協会メンバー（太字で表記したものは1953年改組後の防癆協会メンバー）

1948年中国防癆協会メンバー	
正名誉会長	周詒春
副名誉会長	呉国楨
理事長	顔惠慶
総幹事	呉紹青
副総幹事	欧陽静戈
理事	張維、陸幹臣、欧陽静戈、呉達表、朱恒璧、郭致文、袁貽瑾、高魯雅、陸梅僧、 呉紹青 、李之郁、宋保羅、呉貽芳、裘祖源、繆安成、張嘉甫、施肇基、郭德隆、 嚴欣淇 、艾德敷 (Dwight W. Edwards)、胡適、頼斗岩、曹伯聞、 陳湘泉
監事	沈克非、章元善、徐振東、張孝騫、劉永純、朱章賡、方頤積
常務理事	艾德敷 (Dwight W. Edwards)、陸梅僧、張維、朱恒璧、袁貽瑾、 嚴欣淇
常務監事	章元善、沈克非、徐振東
財務委員	潘垂統、徐振東、徐国懋、 嚴欣淇 、張嘉甫
出版委員	余新恩、郭德隆、 陳湘泉
標準委員	袁貽瑾、 裘祖源 、蔡同方
新年防癆章義売委員	欧陽静戈、艾德敷 (Dwight W. Edwards)、陸梅僧、潘垂統、袁剛中
研究委員	谷鏡汧、劉永純、湯穆司 (H. Thomas)

出典：「中国防癆協会成立経過」『防癆通訊』第1巻第1期、1948年。

げられた。日中戦争勃発後、協会はやむを得ず活動を中止したが、1938年、前駐米大使施肇基は「上海国際救済会」⁽³¹⁾ 宣伝組の主任を担当し、上海防癆協会を結成し、白利南路（現在の長寧路）37号Bに肺癆病院を開設し、肺結核に罹患した戦災者を受け入れた⁽³²⁾。1947年、南京国民政府衛生部防癆設計委員会は全国防癆計画を立て、全国の大都市において肺結核予防治療センターを設立し、BGC ワクチン接種の推進、防癆人材の訓練などを行おうとした⁽³³⁾。同じ頃、アメリカで数年間の研修を経てから上海に戻った肺結核専門家の呉紹青は、外交官の顔惠慶と連携して全国防癆協会の再結成を積極的に推進した。ついに、1948年1月28日、全国各地からやってきた防癆協会の代表が上海八仙橋のYMCAに集まり、防癆協会代表大会を開催し、中国防癆協会を再結成した（表6を参照）。顔惠慶を理事長に、長期にわたって肺結核予防治療に力を尽くした呉紹青と欧陽静戈をそれぞれ総幹事と副総幹事に任命した。しかし、まもなく政権交代が起き、協会の人事が大きく変動したため、協会は全国規模での活動が不可能となり、各地の支会が個別の活動を行うに過ぎなくなった。建国初期における全国防癆工作の状況は良好とは言えず、かろうじて運営を維持するだけであった⁽³⁴⁾。

表7 1953年中国防癆協会メンバー（太字で表記したものは1948年改組前の防癆協会メンバー）

1953年中国防癆協会メンバー	
理事長	黄鼎臣
副理事長	吳紹青、 裘祖源
総幹事	裘祖源
副総幹事	崔毅忱、郭德隆
常務理事	黄鼎臣、 吳紹青 、 裘祖源 、崔毅忱、郭德隆、朱貴卿、闕冠卿、蔡如升、吳霽棠
理事	方石珊、朱宗堯、劉同倫、劉南山、 陳湘泉 、李穆生、顏福慶、李宋

出典：「中国防癆協会新任理事名单与簡歴」『防癆通訊』1953年第5期。

1950年8月6日から17日にかけて、北京で開催した第一回全国衛生会議で、「面向工農兵」「予防為主」「団結中西医」を新中国衛生工作の三大方針として定めた⁽³⁵⁾。1950年代初期以降、中央は各機構に対する一元管理を強めるため、本来上海に置かれていた多くの科学文化衛生機構を北京へ移した。1951年1月、中国防癆協会は事務所を北京に移し、同年3月30日に中央人民政府内務部に成立登録申請を提出し、同年6月4日に内務部社会司第147号の返答をもらった。この時受けた指示には「貴会は中央人民政府衛生部の指導のもとで、各地公衆衛生機構と協力し、改進黨の推進に努めよ」とあった⁽³⁶⁾。

1952年12月18日、中国防癆協会は北京で「各地防癆協会工作會議」を開き、組織再編、各地支部会活動の再開、ソ連経験等の学習会を組織するなどの問題を検討した。半年間の準備期間を経てから、1953年8月29日から4日間にわたる「防癆工作代表會議」が開催され、協会の再編や理事の改選などが決められ、17名の新理事が選出された(表7を参照)⁽³⁷⁾。1948年時と比べて、協会の構成は大幅に簡素化され、会員の出身地や年齢構成などにも以下のように大きな変化が見られる(表8を参照)。

1948年の協会は41名のメンバーがおり、その中で1890年代に生まれた世代が44%近くを占め最も多く、その次に1900年代に生まれた世代が27%近くを占めた。江蘇省・上海市・浙江省の出身者は全体の半分近くを占める。うちアメリカ留学経験を持つものは過半数を占め、YMCAのメンバーや上海セント・ジョーンズ大学の出身者が多い。中華人民共和国成立後、中国大陸を離れたものは少なくとも10名いる。これに対して、1953年再編後の協会には17名のメンバーがおり、その中で1900年代に生まれた世代が41%以上と最も多く、その次に1890年代に生まれた世代が23%以上を占める。出身地について、江南地域の優位性が見られなくなり、全国各地に及んでいるものの、留学経験を有するものが依然として多数を占め、その中でやはりアメリカ留学出身者が最も多い。

もう一点注目すべきは、再編後の協会には、肺結核専門家や公衆衛生専門家が合わせて

表8 中国防痨協会改組前後における構成メンバーの比較

総人数		1948年		1953年			
		41		17			
		人数	総人数の割合 (%)	人数	総人数の割合 (%)		
出身地		江蘇	10	24.39	北京	2	11.76
		浙江	6	14.63	上海	2	11.76
		上海	3	7.32	安徽	2	11.76
		安徽	3	7.32	福建	2	11.76
		湖北	3	7.32	遼寧	1	5.88
		湖南	3	7.32	河北	1	5.88
		山東	2	4.88	天津	1	5.88
		重慶	1	2.44	山東	1	5.88
		北京	1	2.44	浙江	1	5.88
		雲南	1	2.44	湖南	1	5.88
		福建	1	2.44	江西	1	5.88
		香港	1	2.44	貴州	1	5.88
		南洋	1	2.44	広東	1	5.88
		米国	2	4.88			
		不明	3	7.32			
年齢層	1870s	2	4.88	0	0		
	1880s	3	7.32	2	11.76		
	1890s	18	43.90	4	23.53		
	1900s	11	26.83	7	41.18		
	1910s	2	4.88	3	17.65		
	不明	5	12.20	1	5.88		
留学先	米国	21	51.22	7	41.18		
	フランス	1	2.44	2	11.76		
	イギリス	1	2.44	2	11.76		
	ドイツ	1	2.44	0	0		
	日本	1	2.44	2	11.76		
出身大学	協和医学院	5	12.20	4	23.53		
	湘雅医学院	4	9.76	2	11.76		
	セント・ジョンズ大学	4	9.76	0	0		
キリスト教信者		17	41.46	3	17.65		
南京国民政府関係者		8	19.51	1	5.88		
実業家		2	4.88	0	0		
1949年以降中国本土を離れたもの		10	24.39	—	—		
共産党関係者		0	0	1	5.88		
肺結核専門家・公共衛生専門家		13	31.71	13	76.47		

13名に上り、全体の8割に近くを占め、その中で4名が再編前の会員だった（表6・7、太字で表記）が、1948年の協会では医療衛生専門家が3割強しか占めていないことである。その理由について、南京国民政府期において、中国防痲協会は様々な活動で集めた慈善寄付金を資金として利用する場合がほとんどであり、政治界・金融界・宗教界・学術界・医学界など多種多様な団体の力を借りる必要があったためである。一方、1953年の協会は純粋な医療団体として中央衛生部に所属し、過去にあった金融界・宗教界などの社会団体との連携関係はすでに存在していなかった。

衛生部副部長の王斌は1953年の防痲工作代表会議における発言の中で、「解放以来、全国の政治経済状況は画期的な変革が起きたため、我々はとうに計画的に群衆性の人民防痲事業を積極的に展開する可能性を持つようになり」、「防痲協会に所属する専門家達は、マルクス主義とパブロフ学説で理論武装した医学思想に基づき、それぞれ技術の特長を十分に発揮し、人民の健康レベルを高め、祖国の生産建設の保障に貢献できるようになった」などと指摘した。防痲協会総幹事の裘祖源は過去の活動について取りまとめて反省した上で、第一次五カ年計画期を展望し、次のように述べた。

（昔の）防痲協会は組織が不健全で、指導力が弱かったため、群衆の動員や組織が不十分であった。協会の性質と任務も不明瞭であり、長期間大きな成果を収めることができず、政府と人民からの期待を裏切った。第一次五カ年計画開始後、防痲工作の需要は非常に切実なものとなった。今回の会議を通して、協会の性質と任務を明らかにし、組織を健全化し、指導力を強め、医療関係者、特に防痲工作者をはじめとする全員が団結し、協会が人民防痲事業において政府の強力な助けになるよう期待する⁽³⁸⁾。

マルクス主義やパブロフ学説を提唱することに対して、裘祖源が積極的に呼応する言動はほとんど確認できない。1953年に経済建設時期を全面的に開始してから、数多くのソ連専門家が中国にやって来て、計画経済の原則の指導のもとで、中国に重工業を主とする工業経済体系を立てることを支援した。特に1955年、56年は、中国にきたソ連専門家の人数が最も多い時期である⁽³⁹⁾。これによって、1950年代における中国肺結核予防治療事業はソ連の影響を深く受けた⁽⁴⁰⁾。例えば、1955年5月、中央衛生部はソ連医学科学院結核病研究所の組織構造を参考にし、北京に中央結核病研究所（のち北京結核病研究所と改名）を設立し、何穆を所長に、范秉哲・裘祖源を副所長に任命した⁽⁴¹⁾。しかし、アメリカに留学した経験を持ち、協和医学院にアメリカ式の医学教育を受けた肺結核専門家が、ソ連の学説

を積極的に受け入れるとは到底言えられない。こうした態度は、言うまでもなく後ほど反右派闘争の時に大きな罪と見なされた⁽⁴²⁾。

2 この時期の肺結核知識に関する出版物の特徴

1953年6月の中共中央政治局会議と同年夏の全国財經工作会議の後、共産党は過渡期の総路線を正式に確立し、出版業に対する統合や改造などが本格的に始まった。同年6月、東北医学図書出版社および華東医務生活社は人民衛生出版社に合併され、編集部が北京に移された⁽⁴³⁾。翌年、上海の私営出版社や雑誌が社会主義改造を受け、最も影響力を持つ老舗出版社の商務印書館と中華書局が北京に移された。一方、上海市人民委員会文教局は私営上海医学出版社をベースとして、私営広協書局・西南医学書社・宏文書局・千頃堂書局などを統合・改組して上海医薬衛生出版社を設立し、一般読者向けの中西医薬衛生の書籍や雑誌を中心として出版することを定めた⁽⁴⁴⁾。

中国防痨協会の改組および私営出版社に対する改造の完成につれて、この時期の肺結核知識に関する出版物は大抵中国防痨協会総会や人民衛生出版社などから出版されるようになった。

全面的にソ連を学ぶという風潮の中で、この時期の中国防痨協会総会はソ連の肺結核医学書を数多く翻訳・出版した一方で、同時期の欧米や日本などの西側諸国の肺結核知識資料の訳書はほとんど見られない。ただし、1950年代末、中ソ関係が悪化した後、英語や日本語などから翻訳した肺結核医学書が少し増えるようになった（表1を参照）。

この時期に、中国人の肺結核専門家が執筆した肺結核の教科書や専門書はソ連の学説、特にパブロフの理論を多く引用する。以下、呉紹青らが編纂した『实用肺結核病治療学』を例として説明したい。本書は1953年に広協書局により初版本が出版され、翌年に同書局により増修版が出版された。1957年に新しく創設された上海衛生出版社により新增修版が、翌年に2刷目が出版された。1962年に上海科学技術出版社により新第一版が出版され、66年に同社により新第二版が出版された。1953年初版と54年増修版には構成や内容について大きな差異はなく、版式や総ページ数も一致し、パブロフの理論を引用する箇所が随所に見られる。初版と比べて、57年版と58年版は章立てなどの調整があるが、内容から見れば大きな修正は施されてない。基本療法・精神療法などの章には、初版と変わりなくパブロフの理論の引用箇所が残されている。62年、68年版は章立てが大きく調整され、内容も大幅に増やされたが、パブロフ学説の引用箇所が多く削除され、僅かに残されているに過ぎない。表9に引用する二つの版本の該当箇所を見比べるとわかるように、53年初版にはパブロフの学説や人間的魅力に関する紹介や称賛が長く綴られるが、62年版にはもとの長

表9 『实用肺結核病治療学』1953年、1962年版のパブロフ学説を引用する箇所と比較

版本	1953年版第5章「心理療法」	1962年版第18章「精神因素对肺結核病人的影響」四「精神治療の原則」
内容	<p>在新時代中的医務工作者应拋棄那些機械唯物論思想的遺毒、而以巴甫洛夫高級神經活動学説来武装我們的頭腦。(中略)巴氏指出第二信号系統对人類生理学及病理学有巨大的作用。所以全体医務人員必須掌握一套巴甫洛夫式的对待病員的態度。巴氏本人在与病員的關係上、無時無刻不忘記在他面前的是一個活的、而且往往有痛苦万分的人。他对待病員的態度永遠是非常柔和、親切而溫暖。(中略)他对病員的社會和家庭生活、对病員的工作和社會關係方面的特点、其成長和教育、人生遭遇、精神創傷等、一概加予深刻的注意。總之、巴氏關切的就是成為病員高級神經活動形成所在的社会環境和二者間的相互關係。巴氏說：「我們有許多科学根拠使醫師用自己的行為、表情、手勢等影響病員的心理。」</p>	<p>巴甫洛夫指出第二信号系統对人類生理学及病理学有巨大的作用。巴甫洛夫本人在与病人的關係上、也時刻没有忘記在他面前的是一個活的、而且往往有万分痛苦的人、因此对待病人的態度總是非常柔和、親切而溫暖的、並且对病人的生活、工作狀況等等有深切的了解。巴甫洛夫曾經說過：「我們有許多科学根拠証明：醫師用自己的行為、表情、手勢等能影響病人的心理。」</p>

文を半分ほどに簡略化した。

1954年7月30日、毛沢東が「対中医工作的指示」を下し、「今後最も重要なのはまず西医に中医学を学ばせることだ」、「中医学の書籍の整理を行うべきだ。(中略)もし中医医書が整理されなければ、(医書は)絶版になってしまう。優秀な中医師を組織し、計画的かつ重点的に有用な中医医書を古文から現代文に翻訳すべきだ。機が熟すれば、自らの経験の総括と、体系的な中医書の編纂も試みるべきだ」と強調した⁽⁴⁵⁾。同年10月20日、『人民日報』に「貫徹对待中医的正确政策」という社説が掲載され、「西医に対して中医学の学習・研究を呼びかける必要があること疑いない」などと強く指摘された⁽⁴⁶⁾。しかし、肺結核予防治療事業を主導する防痨協会のメンバーは、ほとんど西洋医学の教育によって訓練された医師であったため、彼らが主導権を持つこの時期では、肺結核予防治療法は当然現代医学に基づくものであり、肺結核知識に関する出版物も現代医学の知識を主流とする。

大躍進が始まった1958年に、「西医学習中医班」第一期の研修が完成し、9月25日、衛生部党組が中央に「關於西医学中医離職班情況、成績和經驗給中央的報告」を提出した⁽⁴⁷⁾。これに対し、毛沢東は10月11日に「中国医薬学は我が国の人民が数千年以来疾病と戦った経験の結晶である。その中には中国人民が疾病と戦うための豊富な経験と理論知識が含まれている。(これは)偉大な宝庫であり、(これを)掘り出し、(水準を)高めるよう努力すべきだ」と指示した⁽⁴⁸⁾。当時、西洋医学を信じる医師達も反右派闘争で多く打倒された。これによって、大躍進風潮の中で、各地に不思議な結核中医治療法が次々と報告され⁽⁴⁹⁾、中医学の肺結核専門書も多く出版されるようになった(表1を参照)。

3 肺結核患者の声

前述のように建国直後と比べて、第一次五カ年計画期の政治宣伝が力強く繰り広げられる。このような宣伝のもとで、当時の肺結核患者の声が聞こえるだろうか。実際に、人民共和国成立後、医学知識の資料以外に患者自らの闘病体験が出版されたこともある。しかし、民国期によく見られた個人体験談の単行本と異なり、これらの闘病体験は、肺結核の蔓延を帝国主義・封建主義の圧迫と結びつけ、社会主義制度の優越性を強調し、政治的な色彩の濃いものであった。以下、三つの例をあげて紹介したい。

(E) 傅連璋『結核病的療養』中国防痨協協会総会印行、1953年初版、総12頁、一刷10万冊

傅連璋は長征の時期から毛沢東の信頼が厚く、朱徳に追従し、第四方面軍司令部に保健医として務めた。1937年、傅連璋は延安に中央ソヴィエト医院を開設し、院長に任ぜられ、翌年中国共産党に参加した。建国後、軍隊・政府両系統の衛生部副部長、中華医学会の理事長などに任命された⁽⁵⁰⁾。傅は若い頃に肺結核と闘病した経験を『人民日報』に掲載し、革命人生観と革命楽観主義の精神を以て読者を励まし⁽⁵¹⁾、全国各地から読者の手紙を多く受け、これに対する返答も『人民日報』に掲載した⁽⁵²⁾。その後、これらの闘病体験談を『結核病的療養』という小冊子にまとめた。傅は本書に「解放前、我が国は帝国主義・封建主義・官僚資本主義といった多重の圧迫に迫られ、人民の生活は極めて困窮で、肺結核も普遍的に蔓延していた。しかし解放以後、生活条件の改善や人民政府が積極的に各種の防止治療事業を推進する方策を講じたため、肺結核の発病率と死亡率は減少に転じた」と主張した。また、自らの闘病体験について、このように語っている。

1927年に南昌蜂起の後、私は革命に参加した負傷者や病人を自ら治療し、紅軍の医療活動に直接参加し、革命の同志と密接な関係を結ぶようになった。私は彼らの影響から、民族圧迫や階級搾取の本質を認識するようになり、小ブルジョア的な自らの古い観点を批判し、共産主義の偉大な前途を予想した。私の視野が広がり、思想が展開され、物質上・思想上の一切の負担を投げ捨て、革命に参加した。私は自らを完全に革命に捧げ、生と死を度外視した。これによって私の体は救われた(8-9頁)。

かつてキリスト教徒であり、今は党内の上層幹部になった傅連璋が書いた闘病体験談が肺結核患者に大きな影響を与えたことは間違いない。防痨協会はこの小冊子刊行の目的を次のように述べる。

全国各地の肺結核病患者の参考書となるように。読者が傅連暉同志の療養経験を研究・吸収し、生活の上でこれを実践し、早期に健康を回復し、祖国の偉大な経済建設の持ち場に戻るよう願う（1頁）。

個人主義を抑え、集団主義を優先する時代において、この小冊子は単なる個人体験を紹介するものでなく、民衆に衛生宣伝をする特殊な役割を果たすと期待されていた。他方、一般患者は民国期のように自らの闘病体験を単行本で出版することが難しくなった。ただし、雑誌や新聞紙に掲載された個人の体験談は少なくない。一方、統合や新設を経た国営・公営出版社はこのような個人の体験談を多く集め、文集にまとめる場合もあった。逆に、私営出版社が圧倒的に多く存在した民国期において、多数の作者の文章を一冊にまとめた文集は多いとは言えない。

(F) 『抗癆選集』北京：人民衛生出版社、1954年、総272頁、初版5000冊

本書は北京防癆委員会が発行した機関紙『防癆』（月2回刊、1951年5月から発行、1960年休刊）から、117篇の文章を選び編纂したものである。12章に分けられ、その中でソ連医学の先進的思想及び経験を紹介する一章があり、巻末に質問応答篇が付されている。巻頭に傅連暉の序文を掲載し、下記のように述べる。

結核病はある種の社会病で、その発生と蔓延は国家政治・経済状況と密接に関連する。我が国は解放以来、人民の生活条件の緩やかな改善、日増しに発展する保健事業、医療技術の絶え間ない進歩、広範にわたる衛生知識の宣伝などによって、結核病の予防治療は大きな成績を収めた。（中略）結核病は社会病である以上、防癆事業は社会公衆が一丸となり推進する必要がある。防癆宣伝はその重要な一環である。私はこの小冊子の読者や、結核病の危険性及びその予防治療法を知る人々が、自発的に防癆宣伝を行い、人民に危害を及ぼす疾病に打ち勝つよう努力することを期待する。

本書の作者はほとんど労働者や学生である。内容は多岐にわたり量も豊富で、新政府や毛沢東に対する謝辞のような政治的な表現がしばしば見られる反面、病室の環境が悪い、病院食には多くの問題があるなどの不満も素直に書いてある。実際に、当時肺結核療養所の医療水準の低下、専任医師や監護者などの人材不足により、こうした環境のもとで患者が政治教育をどこまで受け入れたかについて疑問の余地が残る⁽⁵³⁾。

(G) 『我怎樣向結核病作闘争』北京出版社、1957年、総34頁、初版6000冊

(F) と同じく、本書も機関誌『抗癆』から抜粋・編集したものであり、11篇の文章を取

録し、文章量は著しく縮小された。新社会に生きることで結核が治ること、社会建設のために結核と戦うべき、毛沢東に感謝するなど、パターン化した記述も（F）より明らかに増加したが、闘病の体験談については詳細に記されている。執筆者は都市部の労働者や学生が多く、妊娠・出産の後に結核を患う女性もいるが、みな一定の文化的な水準を備えているため、書籍や新聞雑誌を通して肺結核予防治療知識を得ることができた。ある学生は校医に活動性肺結核と診断され、在宅療養という指示を受けた。肺結核に関する知識獲得の過程について、この学生は次のように語る。

よりよく療養するため、私は切実に肺結核と闘う知識を知りたい。例えば、活動性とは何か、ベッドに横になって療養するには何か注意事項があるか、など。同級生は私のために1952年の『抗癆』合本を、次いで1953年の『抗癆』を購読してくれた。（これらの資料から）答えを見つけたため、少し落ち着いた⁽⁵⁴⁾。

もう一人の学生も在学中に肺結核にかかったと診断され、学校と病院のアドバイスを受け、山東農村の実家に戻り、自宅療養を始めた。彼はこの頃の心境について、次のように述べる。

帰郷の当日、私は学校から何瓶かのイソニアジドを受け取った。私は一人で新華書店に赴き『肺結核的予防和療養』を、そして郵便局では『抗癆』を購入した。実家に戻ったあと、こうした肺結核の闘病に関する書籍や機関誌の勉強を通して、私は次第に肺結核の完治は可能だと考えるようになった。労働人民が解放された新中国において、肺結核はもう二度と我々の命を脅かすことはない。これによって、私は病気を克服するのだという自信を強く持つようになり、不安が軽くなり、気持ちも楽くなった⁽⁵⁵⁾。

『肺結核的予防和療養』は肺結核専門医の楊維興が医療現場で得た経験を踏まえて編纂した通俗読物であり、ソ連の肺結核病専門家と中国防癆協会常務理事の崔毅忱・蔡如升の指導の上で出版された⁽⁵⁶⁾。1954年に人民衛生出版社により初版の16000部が発行され、翌年二刷24000部まで増刷された。巻頭の「前言」には本書の主旨を次のように明らかにする。

我が国は過去、長期にわたって帝国主義・封建主義・官僚資本主義といった暗黒の反動支配を受け、これらは人民の極端な貧困と衛生常識の欠如をもたらした。そのた

め解放前、我が国の肺結核蔓延は非常に厳しい状況にあった。（中略）解放以降、労働者が解放されて（国家の）主人になり、国民経済が絶えず好転し、人民の生活水準も普遍的に向上した。これによって、人民は健康に注意する余力を持てるようになった。ゆえに、肺結核蔓延の程度や死亡率が著しく低下した。（中略）周知のとおり、肺結核の予防治療は、単なる政府衛生機構の仕事や責任だけでなく、我々自らの責任でもある。肺結核を予防・治療するため、合理的な社会制度及び良好な物質生活を前提・基礎とする必要があるだけでなく、我々自らが肺結核予防の医学知識を得る必要がある。私は肺結核予防治療の常識を紹介し、読者がこの小冊子から必要な知識を得ることを願っている⁽⁵⁷⁾。

1957年7月、楊維興が本書に大きな修訂を加え、『肺結核病的予防和療養』と名付けて、上海衛生出版社により新1版の初版18000部を発行した。新1版の最後に付されている「修訂版後記」に、「本書編纂の過程で、肺結核予防治療事業に従事する同志から大きな助けを得たほか、数多くの熱心な読者が手紙を送って彼らの要求や意見を述べてくれた」と語った。読者が肺結核専門家の著者に手紙を多く送ったことからして、当時の肺結核医学資料は結核に関心を持つ読者に広く読まれたことがうかがえるだろう。

1950年代、多種多様な出版物を媒介として、疾病に関する政府の宣伝が人々へ広く伝わった。患者はこうした出版物を読み、その影響を受け、また自らの疾病体験と結びつける。結果として、肺結核蔓延の要因に関する人民共和国期の解釈が一層強化されるようになった。つまり、人民共和国成立前は、封建主義や帝国主義の圧迫により、肺結核という嚴重な問題を引き起こしたのに対して、人民共和国成立後、共産党主導の新政権により肺結核予防治療は前代に比べられないほど巨大な進歩を遂げたということである。

おわりに

本稿は、中華人民共和国成立初期において民国期の肺結核医学資料がいかに継承され、また新資料がいかに編纂されたのかを概観した。全国出版社に対する公私合営がまだ完成されていなかった最初の過渡期においては、民国期の出版物の再版本が多く流通していた。全国各地の出版業も統合されておらず、それぞれ特徴を有している。その中で、早い段階から共産党の支配下に置かれた東北地区の肺結核出版物は、最も積極的にソ連の学説や知識を取り入れ、イデオロギーの枠内から肺結核蔓延の要因を解釈した。それにもかかわらず、反右派闘争勃発の1957年後半の前、中国防痲協会のメンバーを中枢とする肺結核予防

治療団体は、現代医学教育を受けた専門家がほとんどであり、しかもアメリカを代表とする西側諸国に留学した経験を持つものも多くいたため、彼らは建国後にはじめてソ連の学説や知識と接触し、中共のイデオロギーの宣伝および中医学を学ぶ呼びかけに対して、積極的な反応を示していなかった。

ソ連の医学知識習得の奨励、ソ連の社会制度を称賛する言論は、建国初期の医学資料の中にしばしば見られる。また、肺結核蔓延の要因については、社会体制の問題というソ連の解釈を踏襲した。中ソ関係悪化後、ソ連に関する記述は多く削除されたが、中国肺結核蔓延の要因は、依然として封建主義や帝国主義の圧迫によって引き起こされた問題であると解釈される。建国以降の肺結核予防治療事業は、新旧社会制度の優劣を説明するさい、格好の例の一つと見なされた。こうした叙述形式は様々な医学教科書や通俗書の大量出版、読者の閲読、防痲工作の展開などによって徐々に定着し、人々の記憶に根強く残った。1983年10月、いくたびもの試練を乗り越え、成立50周年の節目を迎えた中国防痲協会は『中国防痲資料』（第一輯、内部資料）を編纂出版した。2013年の成立80周年のさい、『中国防痲史』『新中国防痲紀実』などを世に出した。これらの資料では、近代中国における肺結核蔓延の要因とその後の解決策は、前述の建国初期にすでに形成された解釈を引き継いでいる。また、中国人民共和国における感染症の予防治療対策は社会主義体制の優位性の証として一再ならず利用されている。

註

- (1) 瞿艶丹「近代中国における肺結核の問題化」『東洋史研究』第77巻第4号、2019年。
- (2) 鐘球・唐大讓主編『新中国防痲紀実』広州：広東人民出版社、2013年、3-4頁。
- (3) 『全国新書目』と『全国総書目』は中国版本図書館へ納入した書籍に基づき編纂されている書誌目録である。前者は1950年に創刊し、月刊、季刊、年2回刊などの刊行頻度で全国最新出版情報をまとめて紹介するものである。後者は1949年に創刊した出版年鑑である。この二種類の書誌目録は中国の書籍情報を調査する上で最も参考となるものである。周向華編『社会科学文献信息检索与利用』合肥：安徽人民出版社、2009年、106-107頁。
- (4) 「読秀知識庫」は北京世紀読秀技術有限公司が提供する中文資料コレクションであり、膨大な中文書籍や新聞雑誌の書誌情報を収録し、一部の書籍は全文を閲読できる。
- (5) 中ソ関係悪化後における肺結核出版物の特徴をよりわかりやすく理解するため、本表の収録範囲は中ソ公開論争が開始された1963年までとする。
- (6) 出版業は大躍進期に大きな変化が起こったため、本稿で主に検討する時代区分の下限は大躍進期としたい。鄭士徳『一個書店經理的自述：樂做新華売書郎』第五章「1958年大躍進時期」（中国書籍出版社、2019年）を参照。
- (7) 呉紹青「会議総結報告」『防痲通訊』1953年第5期。
- (8) 肺結核予防治療の宣伝及び募金のため、上海防痲協会は1938年から国際的な慣習に基づ

き、クリスマスシール（中国語訳は聖誕防癆章）を発行し、毎年12月上旬から発売した。国際交流の一環として、各国の防癆協会はクリスマスシールを互いに送っている（『上海衛生工作叢書』編委会編『上海衛生1949-1983』上海科学技術出版社、1986年、174頁）。クリスマスシールの模様を確認すると、1938年頃のクリスマスシールはクリスマスの色彩が色濃く現れているが、戦後になると、中国情緒溢れるモチーフを多く使っている。1947年から、「新年防癆章」に改名した。1951年に天安門や華表などの人民共和国の代表的な模様、1952年に人民共和国の国旗や抗美援朝のモチーフを用いた。1953年に発行された中国最後の防癆章には、「大家做好防癆、保証工人健康、完成祖国基本建設」や「反对細菌戰」というスローガンが掲げられている。

- (9) “Chinese Anti-Tuberculosis Posters, 1950-1980”, アメリカ国立医学図書館 (National Library of Medicine). <https://www.nlm.nih.gov/exhibition/chineseantitb/index.html> (2023年9月27日接続) を参考。
- (10) 下記の英文書を参考したという。Henry D. Chadwick, Alton S. Pope, *The modern attack on tuberculosis*, Commonwealth Fund, 1942; Jacobs Philip P, *The Control of Tuberculosis in the U. S. A.* New York: National Tuberculosis Association, 1940; H. W. Hetherington & Fannie Eshleman, *Nursing in prevention and control of tuberculosis*, New York: G.P. Putnam's Sons, 1941.
- (11) 「前言」の紹介によると、著者余正行は国立江蘇医学院を卒業した後、南京中央衛生実験院に勤め、1946年に連合国救済復興機関の推薦により同院に衛生専門人員訓練班助教に任ぜられた。のち中央衛生実験院技術員として、同院衛生教導組編訳室に勤めたという。こうした履歴は建国以降紹介される必要がなくなった。1948年10月1日に戈紹龍が書いた序文には、「現在から今後に至るまで、貧困の結果は癆病の蔓延を増やし、同時に民衆が困窮し財産を失ったため、医療状況はさらに困難になる」と述べた。建国後になると、こうした見解は当然、不都合なものとなった。中国国家デジタル図書館蔵遼寧省図書館本『抗癆戦争』巻首、家出版社、1949年。
- (12) 「給您的一封信」余正行編著『抗癆戦争』家出版社、1950年1月再版巻首。
- (13) 福録「保証人民健康、服務解放戦争—東北解放区医療衛生保健事業的建立与發展」『党史縦横』1996年第12期。
- (14) 「東北人民政府衛生部健康委員会結核症防治院一九五〇、一年工作総結、計画報告」『防癆通訊』1951年合刊第1期。
- (15) 隋玉功「解放初期瀋陽幾家出版单位辦的書店」、瀋陽市新華書店編『瀋陽新華書店店志』瀋陽出版社、2007年、159頁。
- (16) 「前言」趙達善訳述『卡介苗』平津防癆協会発行、1949年6月。
- (17) Mary Augusta Brazelton, “Coping with Danger in the Air: BCG Vaccination in the Republic of China and International Projects of Postwar Tuberculosis Control, 1930-1949,” *Cross-Currents: East Asian History and Culture Review*, 30, pp. 35-54.
- (18) 「衛生部決在各大城市 推广卡介苗接種」『人民日報』1950年1月16日。
- (19) 「東北人民政府衛生部健康委員会結核症防治院一九五〇、一年工作総結、計劃報告」『防癆通訊』。
- (20) 西南衛生書報社は1951年1月1日に成立、西南衛生部教育処に所属し、1952年に廃止され、職員が新華書店重慶支店に編入された。『四川省新華書店志』編纂委員会『四川新華書店志1949-1995』成都：四川人民出版社、1997年、101頁。李宋は華西大学医科を卒業した

- 肺結核専門家で、1948年にカナダのマギル大学 (McGill University) に留学したことがある。張筱山「赤水文教初先史事簡記」中国人民政治協商會議貴州赤水市委員会・学習文史資料委員會編『赤文史資料』第五輯「文教專輯」、1990年、78頁。劉茂才主編『四川人材年鑑 1979-1994』四川人民出版社、1996年、1435頁。
- (21) 鄭宝雲「編訳者話」、鄭宝雲・魏文彬編訳『卡介苗菌在防癆展現上的応用』東北医学図書出版社、1952年、2頁。
- (22) 劉起深「評鄭宝雲編訳『卡介苗菌在防癆戰線上的応用』」『中華医学雜誌』1955年第1号。
- (23) 「一切医薬衛生工作者都要進行思想改造」『人民日報』1952年6月18日第6版。
- (24) 現在、「孔子旧書網」(中国最大級の古書通販サイト) で複数部の『医務工作者必須進行思想改造』が販売されており、各地の個人開業医もしくは医務室の印鑑が押されるものが多く、当時本書が医療関係者に広く読まれていたことを説明できるだろう。
- (25) 朱宗堯「我对防癆事業的新認識」『防癆通訊』1952年第4期。
- (26) 裘祖源「結核病知識的發展」『防癆通訊』1952年第5期。
- (27) 雷祥麟「習慣成四維：新生活運動与肺結核防治中的倫理、家庭与身体」『中央研究院近代史研究所集刊』第74期、2011年。
- (28) 張本「裘祖源這幾年幹了些什麼勾当」『防癆通訊』1957年第5期。
- (29) 「防癆陣線上的支新生力量：北京市防癆技術員訓練班結業」『防癆通訊』1953年第2期。
- (30) 「新中国第一批工鉞防癆幹部 中央衛生部工鉞防癆訓練班舉行結業典禮」『防癆通訊』1953年第2期。
- (31) 日中戦争勃發後、上海華洋義賑会は中国赤十字会總會・上海慈善社団連合救災会・世界紅卍字会・中国済生会・中華公教進行会・上海YMCA、中国仏教会などの団体と連携し、「上海國際救済会」を設立した。黄文徳『國際合作在中国：華洋義賑会之研究』第四章「華洋義賑会的財務及其与分会互動」、中国文化大学2004年博士論文、211頁。
- (32) 『申報』1938年11月20日第三張「防癆会售防癆花簽」。
- (33) 衛生部防癆設計委員會編『防癆運動』南京：中央衛生試驗院、1947年11月、12頁。
- (34) 顏惠慶著、上海市档案馆訳『顏惠慶日記』第三冊、北京：中国档案出版社、1996年、1093頁。
- (35) 「第一届全国衛生會議閉幕」『人民日報』1950年8月20日第1版。
- (36) 「本会致全国各地防癆協會函 一九五一年七月二十三日」『防癆通訊』1951年合刊第1期。
- (37) 「本会召開防癆工作代表會議的籌備經過簡述」中国防癆協會召開『防癆工作代表會議』会程』『防癆通訊』1953年第5期。
- (38) 「中国防癆協會防癆工作代表會議勝利閉幕」『防癆通訊』1953年第4期。
- (39) 沈志華『蘇聯專家在中国 (1948-1960)』(北京：中国国際廣播出版社、2003年) 第3章を参照。
- (40) 崔毅忱「新中国防癆組織機構」『中華医学雜誌』1955年第8期。
- (41) 「北京市結核病、胸部腫瘤研究所」雷通海主編、魯鳳珠・呂桂泉副主編『中国腫瘤防治研究機構』上海：同濟大学出版社、1989年、18頁。
- (42) 前掲張本「裘祖源這幾年幹了些什麼勾当」。
- (43) 中国医学百科全集編集委員會・上海医科大学主編『中国医学百科全書 (予防医学)』上海科学技术出版社、1991年、455頁。
- (44) 「上海市人委文教辦公室關於私營出版社、雜誌社社会主义改造方案 (1955年4月)」中共

- 上海市委統戰部・中共上海市委党史研究室・上海市檔案館編『中国資本主義工商業的社会主义改造 上海卷（上）』中共党史出版社、1993年、444-451頁。
- (45) 毛沢東「対中医工作的指示（一九五四年七月三十日）」『毛沢東思想万歳 1949.10-1957.12』51-52頁。
- (46) 「貫徹对待中医的正確政策」『人民日報』1954年10月20日第1版。
- (47) 何愛群「努力發掘中国医薬学偉大宝庫」『人民日報』1958年11月20日第6版。
- (48) 「中共中央対衛生部党组關於組織西医離職學習中医班総結報告的批示」健康報編輯部編『認真貫徹党的中医政策』北京：人民衛生出版社、1960年、1頁。
- (49) 例えば、上海科学技術出版社は「医薬衛生躍進叢書」を刊行し、その中に『肺結核病大蒜療法』（1959年）、『肺結核病羊胆療法』（1959年）などが収められている。
- (50) 穆静「光明磊落的一生—記傅連璋同志」中国科技史料編委会『中国科技史料』第1輯、1980年、47-57頁。
- (51) 傅連璋「肺結核療養的經驗」『人民日報』1952年2月15日第3版。
- (52) 「読者来信」『人民日報』1952年4月24日。
- (53) 島田美和「建国初期における療養事業の展開と労働者の日常」鄭浩瀾・中兼和津次編著『毛沢東時代の政治運動と民衆の日常』慶応義塾大学出版会、2021年、121-142頁。
- (54) 秦小秋「在家裏修養同様可以恢復健康」、北京市結核病防治所『抗癆』編輯室編『我怎樣向結核病作鬥争』北京出版社、1957年、14頁。
- (55) 黄寒松「我在農村養好了病」、前掲『我怎樣向結核病作鬥争』、11頁。
- (56) 楊維興「後記」『肺結核的預防和療養』北京：人民衛生出版社、1955年、卷末。
- (57) 楊維興「前言」前掲『肺結核的預防和療養』卷首。